竹千代賞

処刑される恋心

森本　菜々海

私は処刑される運命にある。
気づいてはいけないことに気づいてしまったかもしれない。

十三歳の夏。
昼休みは涼しい図書館へ来ていた。
そこで海外の本を読んでいると、ある一文に目が留まった。
「ＬＧＢＴを犯罪化している国は六十九ヵ国、同性愛行為に対して、死刑が可能である国は五ヵ国、刑法で死刑を規定している国は六ヵ国。」
（出典　ＬＧＢＴと難民、誰もが生きやすい社会とは　難民フォーラムより）
涼しいエアコンが冷ややかな視線を当てられているみたいで、空気がドンと重くなった。
その緊張感で冷や汗が額から流れてくる。

私は女子なのに、さきちゃんが少し気になってしまう。同性を好きになるなんて処刑されてしまうかもしれない。

きっと私は、さきちゃんのことは好きじゃないんだ。女の子のことを好きになるなんてありえない。これはきっと友達として、だ。

この重い空気にさらに重い圧がいきなり肩にかかる。

「茜！　何読んでるの？」

友達が肩に体重をかけながら聞いてきた。

その声にビクッと怯え、急いで読んでいた本を戻した。

「な、なんでも。」

無理やりひきつった笑顔を作る。

「ふーん。じゃあ何借りにきたの？」

やばい。やばい、やばい。

普通の質問かもしれないのに焦ってしまう。

「こ、こんなのいいかな〜って…。」

背中の横にあった本を引き出して見せる。

特にない、でもよかったのに余計なウソをついてしまって、さらに焦る。

「え〜！　恋占い〜!?　茜も好きな人いるんだ〜。どの男子!?」

男子という言葉に必要以上に怯えてしまう。

「え、えーと、秘密かな？」

本に汗が滲むくらい変な汗をかいてしまいながら笑う。

「まあ、そだよね！　頑張って！」

去っていく友達の後ろ姿を見て、ふう、と息をつく。
行き場のなくなった汗の滲んだ本は、なんだか借りていかないと誰かにお前の秘密を言うぞ、と言っているようで借りたくもない本を借りることにした。
まるで私を脅しているような本を急いでリュックに詰め込んだ。

私は大阪出身だ。
六時間目、教室の外を見ていると思い浮かぶ大阪の風景。
厄を払う獅子舞が舞っている。まるで赤くて魔物のようだ。歯がギラギラ黄金色で恐ろしささえ覚えてしまう。
太鼓の音と人の声が聞こえて、揺れを感じる。
ヘアバンドをして力強く太鼓をたたいていた。太鼓の振動が心に響き渡る。周りには一緒に太鼓をたたいている子供たちと、その様子を観光している人達が大勢いる。
「いよーー！　あいやー！」
暑苦しくて汗をかいて、騒がしくて、人に当たって、それがなぜだか嫌じゃなかった。こんな暑い日は暑苦しくて、懐かしいあの祭りを思い出す。そろそろ大阪では祭りの時期だろうか。
大阪のことはほぼ忘れてしまったけれど。
ここ静岡は緑の山並みや空色の富士山が見える。

学活の時間の今は席替えをするらしい。
六時間目の一番疲れ時、席替えでよかったと嬉しくなった。
「じゃあ席替えのくじを引いてもらいます。並んでください。」

ドキドキと期待が入り混じる。
くじを引くと十八。真ん中の席だった。
最悪。
外も眺められないし、眠れもしない。
さきちゃんはどこになったんだろう。
「では席を移動してください。」
学級委員の呼びかけとともに足早に動き出す。
私は動かし終わった瞬間目を疑った。
隣に、さきちゃんがいた。
最高。
さきちゃんを眺められるし、お話しだってできる。
「さきちゃん、これからよろしくね！」
「わー！　茜と隣になりたかったからうれしい！」
「私も！」
心がぴょんぴょん跳ねるみたいにワクワクする。

私は美術部である。さきちゃんとも美術部の部活で初めて会ったんだ。

あれは桜が舞い終わったぐらいの春。
「ねえねえ、隣いいかな？」
初めての部活で緊張している体に優しい声が駆け巡る。振り向くとそこには身長が低く、すらっと痩せている、

髪の長い女の子がいた。
「かまへんよ！　一人でつまんなかったから、声かけてくれてうれしいよ。」
愛想よくその女の子に接する。
「あれ？　関西弁？　かまへんよってどういう意味？」
不思議そうに聞いてくる女の子。
関西弁が出ていたことに驚いた。いつも気持ちが高ぶると思わず関西弁が出てしまう。
「ほんまに？　関西弁出てた!?　かまへんよっていうのは構わないよっていう意味だよ。」
「そうなんだ！　私、安達咲（あだちさき）。」
「私は望月茜（もちづきあかね）。大阪出身だよ。」
「そうなんだ。大阪ってどんなところ？」
「んー…柄悪くて馴れ馴れしいけど、おしゃれですごく個性の強い、大きな町で良いところだよ。」
と悩みながら言う。
あの春が懐かしいなあ。

「茜、一緒に行こ。」
現実世界からさきちゃんの声が聞こえる。
「行こ行こ！」
今日の部活動の場所は屋上だ。
部活は今日も騒がしいなあ。と幸せ交じりの憂鬱を思う。それは校内の吹奏楽部がうるさいからなのか、美術部がうるさいからなのか全く分からないけれど。
屋上の太陽は距離が近い気がして肌がじりじり焼ける、まるで太陽が私に元気を出せと言っているようだ。

さきちゃんが屋上からの景色を見ている私の後ろから、
「そーいえばさ、今日の学年集会でヤジ飛ばしてたの茜ちゃん？」
さきちゃんにそう言われた瞬間、強い風が吹き、彼女の髪が私の方へなびいた。風とともに、彼女のシャンプーの苺と花の香りが、私の顔に当たる。私は目をつむり、五時間目のことを思い出す。

「では学年主任の先生、お願いします。」
髪の短い切れ目の年長の女の先生が体育館にいるみんなの前に立つ。
体育館にはざっと二百人いた。
こうやって同じ服を着て、同じ体勢で、少しでも違うと排除しようとする。そうやって多様性を押し殺して生きていくのが、気持ち悪いほど嫌だ、と感じた。
学年主任の先生はすごく怖いのでさっきまでウトウトしていた人も、きちんと聞いていた人も先生の会釈に合わせて必ず一斉に会釈する。
「今日、学校に来るとき、ごみが落ちていました。」
先生が淡々と話し始める。
「そのごみを見てすごくモヤモヤしました。皆さんはモヤモヤしませんか？　私は朝から嫌な気持ちになります。なのでごみを見つけたらきちんと拾いましょう。」
「ほんなら先生が拾ったらええやんか！」
…ええやんか…ええやんか…
やまびこのように私の声が体育館に響いた。私はやばっ、と口を抑える。
本当にそう思ったから思わず声に出てしまった。

「おい、今言ったやつ誰だあ！」
その声にどっと笑いが起きる。
みんなは首を動かして声の持ち主を探す。私は普段そんなになまってはいないのでばれてはいないと思うが。
「皆さん、静かにしてください。」
その声で大体の騒ぎ声は静まる。あとは少しの笑い声とセミの鳴き声だけ。

「ああ。」
もう隠さなくてもええか。
「ばれてもうたか。さきちゃん、誰にも言わんとってな。」
「あはは！　やっぱり！　私たちだけの秘密だよ。」
暑いのが吹っ飛ぶぐらいの幸せな秘密に頬がにやけてしまう。
「でも次からは成績関わってくるからこういうこと、したら駄目だよ？」
「せやね。次からはなまらないように気を付けるわ。」
と私が笑顔で言うと
「そこじゃない！」
と空に笑い声が響いた。

その日の夜、明日の用意をしていると、リュックの下から見慣れないピンクの本があって、何だろうと思って手に取ると恋占いの本だった。
あの時は焦っていたから何色の本なのかも気づいていなかったみたいだ。
男女がキスしようとしている表紙に胸がズキっと、なんだか分からないけど痛くなる。

何気なく本を開いてみると、そこには、
「みずがめ座のあなた！　あなたの本当の気持ちを好きなあの人に打ち明ければ結ばれる！
アドバイス！　消しゴムに好きな人の名前を書いて、使い切ったら恋が実る！」
好きなあの人、という言葉になんとなくさきちゃんを思い浮かべる。
なぜさきちゃんが思い浮かんだのか全く分からない。けれどふと思った名前を私は消しゴムにネームペンで書いていた。
この気持ちは何だろう。

その夜は胸騒ぎがする雨が降っていた。
何かが起こる予感がした。

朝になると、昨日の雨のことなんてすっかり忘れて学校に行った。
朝恒例の読書をしていると急に眠気が襲ってきて、目を開けていることができなくなった。
目をつむると、懐かしい景色が思い浮かんだ。

頭上に数えられないくらい多い赤い提灯が、飲み込まれそうなぐらい深い夜の空を照らしていた。
もくもくと煙が肉まんのお店から立ち込めていた。
すごくおいしそうな匂いに思わず
「帰りたいな。」
と泣きそうになった。
舞台で踊る眩しい黄金色の龍が舞っていて、嫌ほど見た景色だった。

祭りはいつも暑苦しくて、早く帰りたくなる。
でもそんな景色はなぜだか嫌じゃなかった。
「伝えたら嫌われてまうで。」
うるさい騒ぎ声の中、幼い女の子の声が脳内に響き渡る。
「好きになったらあかんよ。」
震えた声がなんだか守ってあげたくなるような可哀想な怯えた声だった。
「どこにいるの？」
私の声は騒ぎ声にまるで言っていないかのようにかき消されてしまった。

「…ね…あ…ね…あかね！」
懐かしい夢に浸っていたのに起こされる。
誰だろう、とボンドで接着されたみたいに開かない目を、力を振り絞って開けると、そこは知っているようで知らない、とにかく懐かしさのかけらもないところだった。
見覚えのある顔はクラスメイトだった。
「茜、何寝ぼけてんの？　朝の会、始まってるよ。」
さきちゃんにもかっこ悪いところを見られて、すごく恥ずかしくて夢の中で何があったのか、何を言われていたのか、全く思い出せなくなってしまった。

朝の会が終わり、自由時間のとき、雨が地面に打ち付けている音がした。換気をしている窓から、雨が吹き込んできて頬に当たると、雨がいろんなことを教えてくれているようだった。
「今日、傘を忘れているよ。」

「本、返さないとだよ。」
「今伝えないと後悔するよ。」
いつもなら私の妄想で片づけられるけれど、
今日はなんだか見逃せなかった。
ただ懐かしくて、甘酸っぱい気持ちだけが残った。

体育の授業で私はバスケの試合をしていた。ドンドンとドリブルの音や、キュッキュッとシューズの音がする。
五組と四組で授業を合同で行う。
私とさきちゃんは四組の同じチームで出場した。
「こっち！」
そんな声が四面楚歌だった私の背中から聞こえた。
咄嗟に私はその友達にパスした。
「ナイスキャッチ！」
そんな感極まった私の声が体育館に響く。
しかし、敵の五組も必死にパスがつながらないよう、パスコースを塞がれてしまった。
なかなかうまいな、と感心しながらあたりを見渡し、誰かブロックされてない子はいるか、そう周りを見たとき、同じチームのさきちゃんが敵の五組の子とお話ししているのを見た。
こんな試合中の土壇場に何を話しているんだ、と焦ったが端っこにいるさきちゃんの話を邪魔できるわけもない。
「ほんとにあの子むかつく！」

誰のことを言っているのだろう、とさきちゃんの言葉が耳に入る。
「ねー！　毎回教科書忘れてるよね。」
ブロックされていて、どうにも動けないので、友達のドリブルの音とともにどんどん耳に入ってきてしまう。
「ほんとそれ！　しかも先生に言わずにいるところがむかつくよねー」
とさきちゃん。
「しかも貸すことを強要するんだよね。」
「分かる！　しかも貸さないと泣き始めるよね。あれマジでうざい。」
それぐらいなら貸してあげてもいいんじゃないかな、とため息のような呼吸が出る。
そんなことを聞いていると、ピーと笛が鳴った。友達が敵にボールを奪われて、点を取られてしまった。

しかし、なぜさきちゃんは試合にベストを尽くさないのだろうか、と教室に戻りながら不思議に思う。
聞けない。嫌われてしまうかもしれない。聞けない理由は何事にも本気にならないさきちゃんのそんなところもかっこいい、と私が思っているからだろう。
なぜ先生に隠すぐらいであんな風に言うのだろう。少しぐらい貸してあげればいいのに。その子も泣きたくて泣いているわけではないと思うのに。
私はほかの人になったことがないから、ほかの人が何をどう感じているのかは全く分からないけれど。
さきちゃんの口からは、いつも「好き」という単語は出てこない。
そう感情的にならない、クールなところが良いのかもしれない。私にはないところだ。
私の口からも、いつも「嫌い」という単語は出てこない。
だって、分かり合えない人なんていないから。外国だって、文化や言葉が違う人とだって私が好きを伝えれ

ば分かり合えると信じているから。
階段を歩いているとさきちゃんがさっきの五組の女の子と教室に向かう姿が見えた。
この気持ちに見合う言葉が何も思い浮かばない。
でもなんだか嫌な気持ちだ。
「あの五組の女の子、嫌いだな。」
勝手につぶやいたその口は本当に私のものなのか、疑った。
人生で初めて人が嫌いになった。なぜあの子のことが嫌いになったんだろう。

私がさきちゃんのことが好きだから。

その一文が脳裏をよぎった。
ならばこの嫌いは「やきもち」だ。
本当に好きだからこそ嫌いになったんだ。無差別に嫌いと言っているのではない。
好きだからこそ存在するこの言葉に、少し救われたような、崖に向かって背中を押されたような気がした。
人生で初めて人を好きになった、そして嫌いという証拠がある。
それはとっても綺麗で幸せなことのようだけど、処刑を意味する。
きっと女の子はみんな自分が世界一好きなのだろう。悪口は自分が好きだけど、自分が好きだと言えない、
そんなジレンマの形なのではないか。

教室への階段を上っていると、窓から止んだはずの雨が少し入ってきた。
頬にぶつかると、ハッとしたように雨の声を思い出した。

「本のこと、忘れないで。」
「気づいたなら行きなさい。」
「失敗を恐れたら後悔するよ。」
今まで見ていた景色がなんだか変わっているような気がした。
それはきっと私が変わったからなのかな。

授業が始まった。
シャーペンを動かしていると間違えてしまった。
ふとあることに気づく。消しゴムがない。
それは消しゴムを落としたことを意味する。
机の周りを必死に隈なく探す。こんな死に物狂いの私とは反して、無情にもおまじないをかけた消しゴムはどこにも見当たらなくて、冷や汗どころか血がにじみそうだ。
授業に全く集中できなかった。いったいどこにいったのだろう。

「茜ちゃん、一緒にご飯食べよ！」
友達から食事のお誘いだ。
「うん！　食べよ食べよ！」
消しゴムのことは気になるけれど、見つからないからどうしようもない。
女子が八人ぐらい座ってる机に私も机をくっつけて座る。
「ねえ、なんか茜に好きな人ができたって聞いたんだけど。誰？」
唐突に来た生き生きとした質問と期待の目に戸惑う。

「えっと。秘密かな。」
謎の歓声が起こる。
「えー！　じゃあどんな人かだけでも教えてよ！」
「その男の子のどんなところがいいの!?」
この盛り上がっている雰囲気に押され、口が開く。
みんなは私の考えを受け入れてくれるのかもしれない。
私は変わりたい。自分を隠して、多様性を押し殺したくない。
「私、男の子じゃなくてー」
『言ったら不幸になるで』
脳内で幼い女の子が私に優しく言った言葉が響き渡る。
それでも私はその言葉を無視して、
「女の子が好きなの！」
と勢いよく言った。
「え、キモ。」
その一言でさっきまでの空気が嘘のように凍り付いた。

その噂は瞬く間に広まって、昼休みにばらされたり、ラインでも悪く言われたりした。私は無視されるようになった。
「茜ちゃんは女の子が好きだから、話すと好きになられる。女子なのに女子を好きになるなんて変な人。」
なんて噂が四方八方に言われていた。
こんなことになるなら言わなきゃよかった。

夏休みに入った。でも私の友達はみんな私を遊びに誘わない。去年のカレンダーには予定がいっぱいだったけど、今年は部活の文字しか書かれていなかった。

だからこそ部活の今日を心待ちにしていた。

「今日も体育祭のシンボルマークをやろうと思います。」

という部長の言葉に従う。

私たちは働きアリのように新聞を運ぶ。

こんな蒸し暑い夏で歩くのも億劫でふらふらしながらさきちゃんについていく。

屋上はたまに涼しい風が吹いていて気持ちいい。眼下には茶畑が広がっている。なんだかお茶の少し苦い上品な香りがする気がする。いつもは晴れなのに対して、今日は曇りで日が出ていなくて眩しくない。けれどなんだか蒸し暑くて、嫌な暑さだ。雲行きが怪しくて、雨の匂いがする。

さきちゃんは器用に新聞紙と新聞紙にしわなくガムテープで繋いでいく。

さきちゃんのいつもの小さな体がしゃがんでいるからか、暑さの目眩か、もっと小さく見える。

屋上で十人くらいの人が働く。

「茜、そこの赤、はみ出てるかも。」

「分かった。小筆にするね。」

みんなは噂を知らないみたいに私に接する。

そんなことを気にしていたら作業が進まないからだろう。

楽しみにしていた部活が終わった。

「茜、今日一緒に帰ろ。」
いつも通りのさきちゃんの声、のはずなのになぜだか無感情でさきちゃんらしくない。
まるで知らない人に声をかけられてるみたい。
ポスターの張ってある廊下をとぼとぼと沈黙のまま歩みを進める。
私より先のほうにいたさきちゃんは、私のほうへ踵を返し、仁王立ちになった。
窓から吹く風がさきちゃんの長い透き通る髪をなびかせて、とてもきれいだ。
さきちゃんは手のひらを広げ、
「この消しゴム、茜の？」
そう言った瞬間、終わったはずの梅雨がまた来たみたいに雨が降り始めた。
私は不安を隠して
「消しゴムのカバー取った？」
「なにか書かれていたから、見ちゃった。」
とさきちゃん。
もう、言うしかない。そう決意した。
「さきちゃんのことが好きや。
付き合ってください！」
勢いよく言うと、雨がさらに強くなった。雷も遠くからゴロゴロと私の心境を表すように鳴っている。
雨が屋上に当たる音がして、天井の蛍光灯が突然消えたりついたりした。
私は心臓が口から出そうなくらい緊張している。
「え、キモ。」
その一言を言われた瞬間、雷が落ちて、光がピカッと光った。放心状態だった私に、鳴ることを雷が忘れて

いたように、雷の音が遅れて大きく鳴った。
「そうだよね。」
私が一言、思わずつい、悲しそうに言った。はい、とさきちゃんから私の消しゴムを想いとともに返された。
悲しいことを隠して、私が
「うん！　じゃあ帰ろ！」
と言った。
階段を沈黙の重い空気のまま降りていく。
「あ！　私、今日お迎えだった！　電話しないとだから先帰っといて！」
沈黙に耐えられず嘘をつく。
「分かった。またね。」
「またねー。」
雷でたまに光る校内を飾っているポスターを見物して時間をつぶす。
雨と一緒に私の涙も流れ出ててしまいそうだ。

玄関につくと運動部もすでに帰っていた。
この雨だ。帰っていても無理はないだろう。傘を忘れてしまっていることに気づいた。
外は激しい雨だ。この雨に打たれたら水になってしまいそうだ。
だが、もうそんなことどうでもいいほどキモと言われたことがショックだった。
覚悟して外へ出る。雨が体をたたきつけた瞬間、声がした。
「だから言ったやん。言ったら不幸になるでって。」
突然、雨の音が止んで幼い女の子の姿が見えた。あれは幼いころの私だとはっとした。

幼い私が語り掛ける。周りは大阪の町に囲まれる。普段は騒がしいはずの町がすごく静まり返っていた。
「後悔したやろ。悲しくなったやろ。」
幼い私は冷たく今にも泣きだしそうな声で言う。
「そんなことないよ。」
静かな大阪の町だけが私たちを見守っている。
「私、さきちゃんにこの思いを伝えられてよかった。伝えられないままのほうが後悔したもの。」
私の力強い声が町に響き渡った。
「あんたは後悔してないん？」
幼い私が優しい声で慰めるように語り掛ける。
「もちろん。だからもう大丈夫。恋ってきっと幸せなものだって信じているから。」
そういうと幼い私は笑顔になって
「良かった。」
と消えいるように言うと、町が炭酸のようにしゅわああ、と天へ飛んでいった。

雨が止んでいた。
辺りはまるで時間が飛んだように暗くなっていた。
今のは幻だったのだろうか。
なんだか不思議な世界を見ていた。
懐かしくて神秘的で少し切なくて、いつのまにかぽろぽろと涙が止まらなくなった。
本当に好きじゃないのに、付き合うのはきっとおかしい。
好きを無関心にするのも難しい。無関心を好きにするのは難しい。

人生って本当の愛を探す旅だから。
本当に好き同士で付き合えるＬＧＢＴは真の愛の形かもしれない。

雨が止んだ夜空に虹が架かる。
幻だろうか。今日、話しかけていた雨が私に見せてくれている景色だろうか。
人って虹みたいに色がたくさんあると思う。
握っていた消しゴムを暗い夜空の虹に投げる。
遠くまで飛んで行って私の恋心がどこか遠くへ飛んで行った気がした。
近くの日本平ホテルの綺麗な花火が天高く上がって、大阪の町で見た花火に重なった。
投げた消しゴムが花火となって天に打ちあがってはじけ散ったように感じた。
嫌いを嫌いと言える妥協をしない「ＬＧＢＴ」は、ハードルが高い。
さきちゃんを好きになれて、ＬＧＢＴで本当に良かった。

どこからか幼い子の笑い声が聞こえた。